

散歩道

さんぽみち

2007 夏



三年目を迎えた フェニックス花火

訪れる人にとって魅力的な街であること

それは、子どもたちが誇りを持って暮らせる街

そして、創り出せるのは唯一我々大人たちの想いから

(復興祈願花火フェニックスのコンセプト)

平成十六年に襲った水害や震災そして雪害、想像を絶する自然の驚異を見せつけられたことも、今年は、暖冬の話に消されています。

今振り返ると、ちょうど二年あまり前、夢の実現のために動き出しました。言うこと、考えることは、簡単です。しかし、その思いを伝え、形にするのは、やはり容易では、ありませんでした。復興のために、シンボルとなるような大きな花火。試し打ちを三回も行った花火は、初めてのことに。たくさん仲間が、力を合わせたことが、大きな力につながりました。花火師にも大きなブレッシャーだったと思います。それぞれの花火師の心意気を感じさせてくれました。

涙の出る花火と評価され、二年目には、上げる前に大きな拍手をもって紹介され、みんなの花火が、定着したことを感じました。特に、空襲を経験した方が、この花火で終戦後はじめて花火大会に行くことができた。この話を聞いて、ひとつの時代の経過を感じました。

中山間地をもち、新しい交通網ができ、かつて街道を行き来した人の流れ



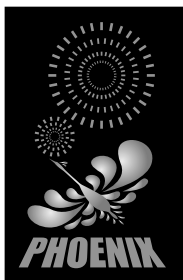
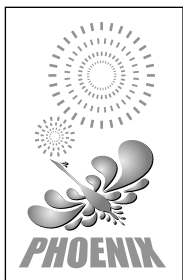
の変わった長岡のような街は、各地で見られます。災害を受けたことで、人と人の絆を復活させ、花火のように小さな星をたくさん集めて大きな花火として、外に発信することが、地域の活性につながります。実行委員会は、NPOとして各地域と連携するネットワーク事業、『食』『風』『闘牛』『マラソン&ウォーク』『音楽』そして『バスケット』その他の『スポーツ』など多様な事業により地域を活性化させるプロジェクト事業、地域独自の商品開発による経済を活性化するエンタープライズ事業、これらを支援するサポート事業など多岐にわたる地域活性化に取り組んでいます。

今年も、三年目、おかげさまで多くの方々に支えられ、活動してまいりました。フェニックスの迫力は、現地に来て、自分の五感で感じてこそ、大きな感動を得られます。それは、この花火が普通の花火でなく、みんなの想いで舞い上がってらる（らる）ことだからです。

今年もみんなで、フェニックスを舞い上げましょう。

廣井 晃

(NPO復興支援ネットワーク・フェニックス代表)



フェニックスマーク

